

総括： シンポジウム「旅・観光・歴史遺産」の成果と課題

岩 鼻 通 明

趣旨説明に記した2006年のシンポジウムでは、実践的な歴史地理学の再生が強調されていたことを印象深く記憶している。そのシンポジウムから、ほぼ10年を経過した今回のシンポジウムでは、文化的景観の選定や世界文化遺産の登録の過程において、まさに実践的活動が歴史地理学の研究者たちによって担われていることを実感するに至った。

個人的にも、この間、山形県における世界遺産登録運動に関わる委員を務め、登録がいったん棚上げされた後も、西村山郡大江町の国重要文化的景観選定へ向けての委員会に関わり、2013年3月に「最上川の流通・往来及び左沢町場の景観」の選定が実現した。2014年10月の東北地理学会秋季大会の巡検で、選定された左沢の町並みを訪問したが、保存活用が進みつつあることを実感した。

選定以降、訪問する観光客も増加していることは明らかであるが、なによりも、選定によって地域住民が自らの町に誇りを持つようになった意識の変革が重要であると思われ、鈴木コメントにも示唆されているように、それこそが地域の再生と創造に結びつくものと期待したい。

さて、報告順に戻れば、浅川報告で行われた田中智彦の再評価に関連して、現地踏査に依拠した古道の歴史地理的復原は、依然として残された課題であるといえよう。たとえば、山形県では、庄内と内陸を結ぶ六十里越街道の復原が「六十里越街道」を記録する会によって、10年がかりで行われ、近年は古道

歩きのイベントに多くの参加者が集まるに至っている。この古道は明治前期に荷車が通行可能なように拡張されたと伝えられるが、それでも道なき道を切り開きながら、長い時間と労力をかけて復原が実現した。このような地道な活動が各地で展開されることによって、田中智彦が追い求めた巡礼と参詣の道の精緻な復原が可能となる。

ところで、原のコメントにみられる巡礼と参詣の概念については、かつて筆者も論及したことがあった¹⁾。甲斐国の宝永8年の村文書によれば、伊勢参宮と富士参詣に際して「そうじ」（原論文の刊行時にはサカムカエを指すものか、と記したが、精進を指すと解釈すべきであろうか）は許されたが、留守宅への「はなむけ」は禁止されていた。その一方で、巡礼に際しては「そうじ」と「はなむけ」が共に禁じられており、「順礼之儀ハ父母之為菩提」と記されており、祖先崇拜的色彩が強く、家の儀礼としての側面が強かったものと推測される。参詣にともなう精進および「はなむけ」は個人に対する儀礼であったのだろうか。いずれにしても、この史料から、当時の人々が順礼と参詣を区別して認識していたことが知られる。田中智彦が指摘した巡礼と順礼の時代的变化に加えて、地域的差異が存在した可能性もあるので、今後は各地の同様の事例を積み重ねて検討することが重要となろう。

一方で山岳信仰については、西海報告で指摘されたように、通過儀礼とのかかわりが大

きく、いわば現世利益的側面が大きかったものと思われる。ただ、近世の出羽三山信仰は死者供養的側面も濃厚に有していたが、東日本大震災で三陸から福島県浜通りにかけての信仰圏内で津波被災によって、多くの信者の人々が犠牲となった。震災後に、その慰霊塔が羽黒山山頂の霊祭殿の脇に建てられ、今なお死者供養の場として重要な役割を果たしているといえよう。

浅川報告では、アニメ聖地巡礼という、きわめて現代的なブームも指摘された。この点に関して、由谷および佐藤による興味深い共著が刊行された²⁾。本書の中で、由谷はアニメ聖地巡礼が日本の伝統的な順礼を継承していることを、奉納された絵馬や聖地に置かれた順礼ノートから実証的に分析した。さらに、佐藤は戦国史蹟巡礼において、ゲームソフトや、ゆるキャラ、およびコスプレといった要素が若い世代に対する集客効果の大きいことを論証した。歴史遺産観光は、どうしても中高年層が主たる対象となり、若い世代への浸透が課題として残されているが、本書で提示された方向性は、その空白を埋めるものとして注目される。

また、総合討論で熱い議論が交わされたように、明治以降の近代化の過程で、参詣の旅は変質を余儀なくさせられた。この点に関しても、かつて善光寺参詣の近代化に関する小文を記したことがあった³⁾。

そこでの分析結果でも、総合討論での指摘とまさに合致する明治22年以降の鉄道利用が旅日記に記されている。信越本線は明治18年に高崎－横川間、19年に直江津－関山間、21年に関山－長野－軽井沢間が開通し、残された碓氷峠越えのAPT式線路が26年に開通しており、旅日記の鉄道利用の記載は、まさに鉄道開通と対応した現象である。この論文で利用した旅日記で、明治22年以降のものは、22・23・24・29・31年および大正14年、昭和19年となる。興味深いことに、大正14年の旅

日記には「新潟から長野善光寺参詣後に夜行列車で車中泊し。高崎から上野へ」、昭和19年の旅日記には「1月2日午後下り長野善光寺車中1泊」という記載がみられ、それ以前のように門前の旅館に宿泊することなく、夜行列車で移動したことが知られる。これもまた、旅行の近代化の一側面であり、荒山報告で指摘された内地から植民地への夜行列車利用の行程と共通するものといえよう。また、平山報告で示された大都市圏からの日帰り参詣と対照をなす遠距離参詣の変容を示したのものである。

平山報告と内田コメントの延長線上にある伊勢参宮と修学旅行の関わりを新たな面から追求した太田孝が、先日、急逝された。太田は、戦後の団体旅行ブームのルーツを戦前の伊勢参宮修学旅行に求めたという点で注目に値する⁴⁾。この論文を含む研究成果は遺著として刊行されるとのことであるが、残された我々は遺志を継いで、戦後の団体旅行ブームのさらなる解明に臨まねばなるまい。

今回のシンポジウムでは、むしろ団体旅行ブーム以降の新たな展開が話題として取り上げられた。SITおよびFITと呼ばれる新しい観光の動向に観光地も対応することが要求される時代になりつつあることを、島津・鷺崎報告は提示している。急増する中国人観光客は、今まさに団体旅行から個人旅行へ変わりつつある時期といえ、東日本大震災の影響が観光面で残る東北地方にとって、雪景色といった東アジア地域の多くでは体験することのできない景観を味わう機会を提供すべく、柔軟に対応することが求められている。外国人観光客を含めた交流人口を増やすことが、定住人口を増やすことを期待できない地方都市や農山漁村において、地域の再生と創造につながるといえよう。

最後に、過去2年間の特集で、世界文化遺産の問題が、ほとんど取り上げられることになかったという指摘が行われたが、今回のシ

ンポジウムでは、まさに世界文化遺産登録を目前に控えた舞台での議論となったことは特筆に値する。

すなわち、島津・鷲崎報告が対象とした「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」、および松井報告が対象とした「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」であり、長崎外国語大学に会場を提供いただき、地元でのシンポジウムが実現したことは、まことにタイムリーであった。残された課題もあることを、両報告から知ることができたが、それらを克服しながら、世界文化遺産登録が実現することを祈念したい。

ただ、民俗学の分野とは、若干のギャップがみられることもうかがわれる。すなわち、文化的景観の受容をめぐる日韓の相違と近接化、世界遺産条約における文化的景観概念と日本における文化的景観保護制度のギャップといった問題点が指摘され、山元報告で対象

となった慶州良洞マウルと対をなすかたちで世界文化遺産に登録された安東河回マウルにおける伝統の創出についても論及されている⁹⁾。歴史地理学と関連分野のさらなる連携が、文化的景観や世界文化遺産の進展を生み出すことを期待して稿を終えたい。

〔注〕

- 1) 岩鼻通明「近世史料にみる巡礼と参詣の概念」村山民俗11, 1997, 25-26頁。
- 2) 岩鼻通明「書評：由谷裕哉・佐藤喜久一郎著『サブカルチャー聖地巡礼』」宗教民俗研究24, 2015 (投稿中)。
- 3) 岩鼻通明「近代の旅日記にみる善光寺参詣」長野213, 2000, 17-22頁。
- 4) 太田孝「昭和戦前期における伊勢参宮修学旅行の研究」人文地理65-4, 2013, 1-19頁。
- 5) 岩本通弥編『世界遺産時代の民俗学 グローバル・スタンダードの受容をめぐる日韓比較』風響社, 2013。